

エミール・ノルデ展

20世紀初頭のドイツに展開した表現主義を代表する画家、エミール・ノルデ(1867-1956)の展覧会が日本で開催されるのは、1982-83年に東京の国立西洋美術館と北海道立近代美術館で開催されて以来、約20年ぶりのことです。今回は特に水彩画と版画に焦点をあて、色彩と幻想の画家としてノルデをご紹介します。デンマークとの国境近くに建つゼービュルのノルデ美術館の協力を得て、約140点もの作品が並んだ展覧会は、制作年順ではなく、描かれたモチーフ(風景/人物/ダンス/花/幻想/描かれざる絵)ごとに章立てが行われ、ノルデの画業を通じてその関心の変遷がつかめる構成にしました。

エミール・ノルデという画家は、フランス近代の芸術家たちと比べると、日本では決して知名度の高い画家ではありません。しかし、担当者を驚かせたのは、彼の作品に魅せられた方々が見せる思いの熱さでした。開催前においては関西方面からもポスターやチラシの発送の依頼を受け、会期中は展示作品の詳細な情報をお尋ねになる方が多く、またカタログや絵はがきの人気の高さも特筆すべきものでした。そしてそのような状況を反映してか、入館者数も終盤に向かうにつれ、数を増していったのでした。

ノルデと日本の間には浅からぬ縁があります。1913年に南洋旅行への途上シベリア経由で立ち寄ったことをはじめ、水彩画に和紙が用いられていたことも知られています。たっぷりとしめさせた和紙の上に絵の具を遊ばせ、画家の予期せぬ偶然の効果を積極的に制作に利用しました。時を重ねても色あせぬ北ドイツ特有の湿り気を帯びた風景や、しっかりと大地に根ざす花々の美しさに目を奪われながらも、画家と私たちを結ぶ遠い絆に思いをさせた展覧会でした。(ly)



「エミール・ノルデ」展会場風景



「エミール・ノルデ」展チラシ